

「魚服記」 (太宰治)

本州北端の山脈にある小山、馬禿山の麓にある滝を圍む絶壁から、今年の夏、植物採集に來た都の學生が滝壺に落ちて死んだ。滝の傍の茶店の十五歳の娘、スワがそれを目撃した。學生は一度滝壺深く沈んでから、上半身が水面から躍り上り、亦ぐつと水底へ引きずり込まれた。

スワは滝の近くの炭焼小屋で父親と暮してゐた。茶店はスワが十三歳の時、夏場に遊山客にラムネを賣つて生活の足しにしようとして父親が拵へたものだったが、賣上げは無きに等しかつた。天氣が良いとスワは裸になつて滝壺近く迄泳いで行き、客らしい人を見つけると「やすんで行きせえ」と叫んだ。

それから二年、スワは少し思案深くなつてゐた。或日、滝の傍でぼんやりしながら、父親が昔語つてくれた樵の兄弟の物語を思ひ出す。弟は川で取つた魚を家に持ち歸り、兄の歸る前に食べ始めたなら美味しくてやめられず、みんな食つて了つたら「おそろしい大蛇」になつて川を

泳ぐ身となつて了ふ。驅けつけた兄が堤の上から、弟が川の中から、名前を「泣き泣き呼び合」ふが「どうする事も出来なかつた」といふ話だが、スワは兄弟が「あはれであはれで」ならず、「父親の炭の粉だらけの指を小さな口におしこんで泣いた」ものだった。

そこに父親がやつて来て、「スワ、なんぼ賣れた」と訊く。スワは返事をしない。「もう店しまふべえ」と父親が云つて、歸途につくと、スワが父親に「おめえ、なにしに生きてるば」と云ふ。「判らねぢや」と父親が呟く。「くたばつた方あ、いいんだに」と毒づくスワに父親は平手を上げるが、スワが「そろそろ一人前のをんなになつて」「氣が立つて來た」のだと思ひ、「そだべな」とだけ云ふ。スワは「阿呆、阿呆」と怒鳴つた。

盆が過ぎると父親は炭を村に賣りに行き、金が出来ると決つて酒臭い息をして歸つて來た。或日、スワは珍しく髪を結つてみたが、夜になつても父親が戻らないので先に寝て了つた。夢心地であるとき、「疼痛^{とうつう}」がして、「からだがしびれるほど重」く、「あのくさい呼吸を聞いた」。「阿呆」とスワは叫び、雪の舞ふ外に走つて出て、滝の上から「おど！」と云つて飛び込んだ。氣がつくと小鮒に變身してゐた。氣持がさつぱりして、滝壺の近くの淵を泳ぎ回り、やがて身體をくねらせながら滝壺に向ひ、忽ち「くるくると木の葉のやうに吸ひ込まれた」。

太宰の最初の短篇集「晩年」に收められた作品だが、太宰は結末について、當初、結びの一句は、「三日のうちにスワの無慙むざんな死體が村の橋材に漂着した」とする積りだったが、「作品の構成が破れ」るのを懸念して削つて了つたのを「深く後悔してゐる」と木山捷平に書き送つてゐる。「後悔」する必要があつたとは、必ずしも私は思はぬが、それはさて置き、人生の慘むじい眞實こそが太宰文學の母胎であつた。太宰は「不幸にたいする特殊な鋭い嗅覺をもつて」をり、その「風景の美は人間の不幸といふ一事にきはまる」と福田恆存が評した所以だが、「魚服記」はさういふ「風景の美」を端的に示す作品である。多感な思春期を迎へ、「なにしに生きでる」かも分らぬ父親との暮しに苛立ち、父親に陵辱りやうじよくされて死に追ひやられるスワは哀切きは極まりないが、「一人前のをんな」になりつつある娘と暮して、人間の弱さ醜みにくさ愚かしさを曝け出す貧しき父親も「あはれ」である。後年の作「鷗」に於て語り手の小説家は、小説を書くに當り何か「信條」があるかと問はれて、「あります。悔恨です（中略）悔恨の無い文學は、屁のかつばです」と答へるが、人間の悲哀に對する「鋭い嗅覺」の感じられぬ文學も、「屁のかつば」と云ふしかない。

（「晩年」、角川文庫）